

ナゴヤ・ピース・ストーリーズ —ほんとうの平和を地域から—

平田雅己・菊地夏野 編
風媒社 2015年



名古屋市立大学大学院人間文化研究所

曾我 幸代

戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。

(ユネスコ憲章前文より)

本書を読み終えて、まず思い浮かんだのが、この一節であった。戦後まもなく設立されたユネスコが公表した同憲章である。その冒頭部に記されている一文である。

本書のタイトルにある「ピース (peace)」、平和とは何を表しているのだろうか。それは、手の届かない、現実からは程遠い桃源郷のようにも聞こえる。平和という崇高な理想を現実にするなど、到底不可能である。多くの人がそう思っているのではないだろうか。しかし、その現実的な可能性を示したのが本書である。だからといって、平和とは何かについて専門的な議論を展開しているのではない。私たちが住みたいと思える街とはどのような地域社会であるのかと、一人ひとりの日常に引きつけるのである。そして、その日常の暮らしや営みが「当たり前」として「在る」ということに改めて気づかされる。

「平和」とは、何気ない日常であるのかもしれない。住み慣れた街で大切な人たちと過ごせること、毎日の飲食に困らないこと、夜布団に入って眠れることなど、私たちが普段気に留めていない当たり前にできていることや「在る」ことこそ、「平和」であるように思わせる。それが決して崇高な理想ではなく、私たちが身近にあるということに本書は気づかせる。なぜなら、本書で取り上げられた一つひとつには、その日常を何らかの理由で奪われた人たちの姿が書かれていたからである。「平和」を奪われた者が現実を受

け入れながらも、改めて「平和」のために立ち上がり、声をあげる人たち、および彼ら／彼女らが向き合っている問題は、一見私たちと無関係のように思えるかもしれない。しかしながら、本書は私たち一人ひとりの日常こそ問い直さなければならぬことを想起させるのである。誰が加害者で、誰が被害者であるのか、容易に明確な回答が得られそうな問題も、本書はその複雑性に私たちをいざなうのである。そして、自身も加担しているかもしれないという現実を突きつけられるとき、私たちは自身の日常を今一度振り返り、捉え直すことが求められる。

一般的に、「戦争」は平和と対置して使われるが、その戦争を私たちはどう捉えているのであろう。また、学校教育でそれはどのように取り扱われてきたのであろう。戦後七〇年余が過ぎ、「平和ボケ」という言葉で形容されるように、現代の日本社会に生きる私たちの中でどれほどの人が武力による戦闘行為、およびそれによって尊い命が奪われる戦場を想像できているのだろうか。近年、報道で見聞きする中東地域で起きている戦争について、また日本が直接戦闘行為に加わっていた過去の戦争について、私たちはどれほどの事実を知っているのだろうか。経験した人一人ひとりの記憶に傾聴し、戦争

の実態を多角的に捉えることをしてきたのだろうか。

戦争に限らず、関連する日本国憲法第九条や慰安婦、沖縄、朝鮮、また三・一一後の原発事故被害者、放射能、福島、リーマンショック、外国人労働者、銃、セクシュアル・マイノリティなど、本書で取り上げられている内容は多岐にわたる。すべてに共通するのは、「当事者意識」ではないだろうか。他人事として、自身と一線を引き、関係のないものと認識するのではなく、自分事として捉える見方を本書は提供する。例えば、ハロウィーンの夜に射殺された高校生服部剛丈君の両親と銃社会について記された章では、「銃が身を守る」ということの賛否を超えて、武器を所持しなければ自衛できないのかという本質的な問いを私たちに投げかける。服部夫妻は剛丈さんの死亡保険金や寄付金をもとに奨学金制度「YOSHII基金」を発足させ、経済的に余裕のないアメリカの高校生が日本に留学できるようにした。その奨学生の一人が書いた感想文の一節が紹介されている。

日本にはおたがいを思いやり、和を大切にすることがあります。それの人への信頼感も失われていません。階級の差もアメリカほどではありません。何よりすばらしいのは、銃が

なければ自分を守れないと、だれ一人考えていないことです。

(二五一頁)

私たちは何か問題に直面したときにその賛否や是非を問う。しかし、こうした二項対立的な図式に基づいた認識のままでは、時にその溝をより深め、解決には至らない。二項対立で問題を捉えた上で、その両者の橋渡しをするためには、オルタナティブな思考が求められる。先の留学生の言葉はそれを如実に表している。銃を持つ、持たないという以前に、私たちが「生きる」上で何が本当に大切であるのかを問いかけるのである。

オルタナティブな思考は平和な社会を築く前提として、私たち一人ひとりの幸せで安心のできる暮らしや営みがあるということに気づかせる。一人ひとりが個別の平和な「生」を生きているということ、そしてそれが突如何者かによって奪われる／かもしれないということ、本書はさまざまな視点から物語る。何が起きているのか、起ころうとしているのかという状況を捉え、何に価値を置かなければいけないのかを改めて考えさせる。本書で挙げられている事例は、人間という存在が、言い換えれば、いのちが大切にされている社会であるのかを私たちに説いている

ようでもあった。

もう一つ、本書が私たちに問いかけるのは、他者とともにいる技法についてである。ここで挙げられたオルタナティブな手法は対話やジャーナリズム、演劇、スポーツ、草の根の学び舎など多岐に渡る。何か問題に取り組もうとすると、私たちはまずフォーマルな場での会議を想像するだろう。しかし、時に会議という場での話し合いは予定調和のもので話が進められたり、異なる意見を出すことが躊躇われたり、対立する意見が平行線のまま接点を見出すことができなかったりする。そうした議論の限界を超えて、他者とともにいる技法やアプローチ、コミュニケーションのあり方がそれぞれの文脈に適したあり方として示されている。一対一の関係、一人の人間が一人の人間の「生」を理解しようと試みる他者理解のあり方を読み取ることができる。

ここには他者の話に傾聴する姿がある。目の前にいる他者（本書では社会的に「少数者」である方々の話がまとめられている）が何を求めているのか、または何を秘めているのかを真摯に聞き取ろうとする著者から、私たちは彼ら／彼女らとともにいることをしてきたのだろうか、話を聴こうとしてきたのかと内省する。彼ら／彼女らの状況をわかって

としてきたのだろうか？ 難しい問題、大変な問題と、自身と距離を置き、考えることや聴くこともやめ、「わかったふり」をしているのではないだろうか？ 私たちは一方的に印象や感情を当事者に押し付けていないだろうか？

個人が尊重され、一人ひとりが大切にされる社会は、他者とともにいるということ、その方法が問われる。個よりも全体が重視される意思決定でもなく、他者を管理や支配、搾取する関係でもなく、一人ひとりの個がケアされながら、つながり合うことが求められる。一度分断した関係をつなぎ直す技法や、それらがつながり合うヒントが本書には込められている。それが正解ではない。一つの解として、あり方として捉え、私たち一人ひとりが他者とともにいるために始められることをまずは考えてみたいと思わせる。本書に記録された人々の姿からは、今をそれぞれの場で生きる人々の草の根の、現実的な行動とともに、「平和」な日常の暮らしができる社会を希求した未来志向性を読み取ることができる。この理想と現実の間にある距離を縮めていくプロセスをいかに築いていくかが問われていよう。

換言すれば、本書は読者に一人ひとりに染みついていく価値観や行動、ライフスタイルを問い直し、日

常の「生」を捉え直させるのである。人々のいのちに寄り添うとはどういうことであるのかを、また、「あなた」はどのように生き、他者とともに「在る」のかを、さまざまな視点から考えさせる。それは、私たちのあり方を映し出す鏡とも言えよう。

最後に、編著者の一人である平田の言葉を引用して、本稿の結びとしたい。彼は本書の冒頭で次のように述べる。「求められているのは、この地域に住む我々と共に絵筆をとる人たち、つまりあなたなのである。」「あなた」が本書から何を感じ取り、考えるのか、そして他者とのようにいたいと思ひ、それを具現化するのが問われている。それは「あなた」が「この地域に住む」一人であり、また平和な「あなた」の日常が「この地域」の平和につながるからである。本書が「あなた」の心の中に平和のとりでを築く一助となることを願っている。